

柄鏡形住居跡（新山遺跡）

去りし人々

人々が最初に「くるめ」に足を踏み入れて（今から約2万5千年前）以来、約2万年の間、豊富な湧水のまわりに集った人々の生活の跡が、突然消えてしまう時期があります。

縄文時代の中期末～後期にかけて、関東地方から中部地方の極めて限定された地域にだ

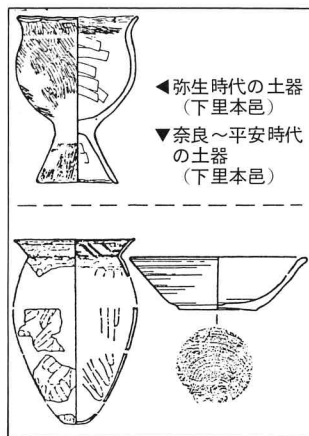
け、「柄鏡形住居跡」と呼ばれる特異な遺構が出現します。この遺構は、普通の竪穴住居跡と異なり、手鏡の柄のような張り出し部をもち、敷石、配石、埋設土器、立石などの施設や、石棒、機能を失なった石器類を伴出するという祭祀的要素の強い特徴をもっています。そして、この柄鏡形住居を最後として、途絶えてしまうムラが多いのです。新山遺跡もその一つで、くるめの湧水のまわりに集った人々は、それを最後に、生活の跡を消してしまいます。

噴火、環境条件の悪化、人口の増加による食料不足など、いろいろな原因が考えられています。人々は生活の安定を願い、それまでに知っている祭祀を駆使したのでしょうか。

柄鏡形住居跡は、思い出多い“ふるさとくるめ”を去り行かねばならなかった縄文人の熱い胸の内を私たちに静かに語りかけてくるようです。

耕作と弥生文化

縄文時代は採集・狩猟の時代、弥生時代は農業の時代といわれています。弥生時代にな



るとくるめ市域から人々の生活の跡がほとんど消え、黒目川の下流域へと分布域をかえます。

開墾・耕作、水田用地には、川幅の広い湿地の豊富な土地の方が適していたのでしょう。

時代の周辺地 “くるめ”

弥生時代以降、生産経済の急激な発達に伴い、大和朝廷の誕生、律令制と、中央国家を中心に政治・経済・文化は発展しました。

しかし、“くるめ”など街道から離れた地方ではその影響を受けながらも、竪穴住居に住み、人々の生活は、決してはなやかなものではありませんでした。2軒～3軒の小さな竪穴住居に静かにくらす人々の生活跡が、新山・下里本邑、向山などの遺跡で発見されています。

編集：東京都東久留米市教育委員会
社会教育部文化課

東久留米市 くるめの文化財 第2号

昭和60年3月
東久留米市教育委員会

東久留米の遺跡

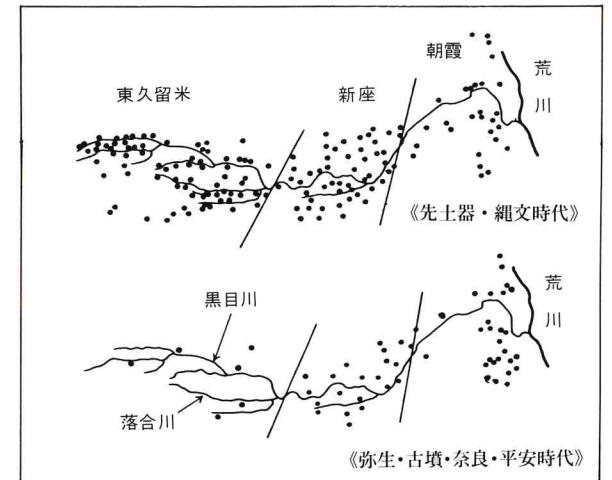
湧水と “くるめ”

東久留米市は、湧水の豊富なところで、過去の記録を含めると30ヶ所をこす湧き水がありました。それは、東久留米市域が、地下水

の湧出しやすい地形となっているためです。それらの湧水が流水となって大地を刻み、黒目川、落合川、立野川などの諸河川をつくり、万物の命の水となっているのです。湧水市東久留米の血管といえましょう。

川と遺跡

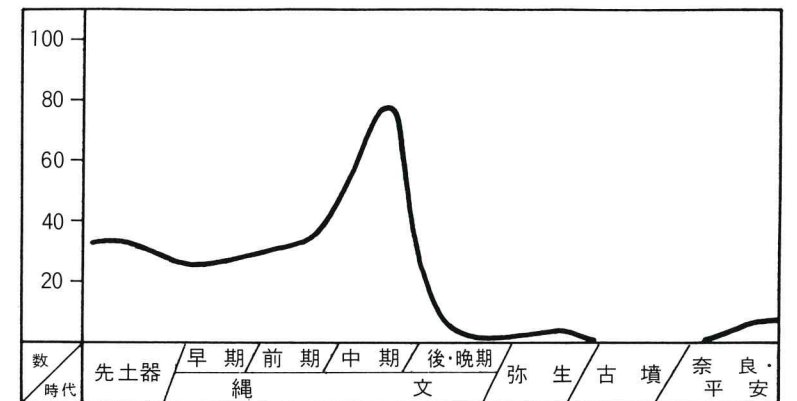
市内には、小流をも含めると10にも及ぶ川が流れています。現在確認されている遺跡は、それらの川にまわりつくような分布状態がみられます。遠い昔から人間をはじめ生きものすべて「水」のまわりにあつまり、深いかかわりをもって生きてきたことがわかります。



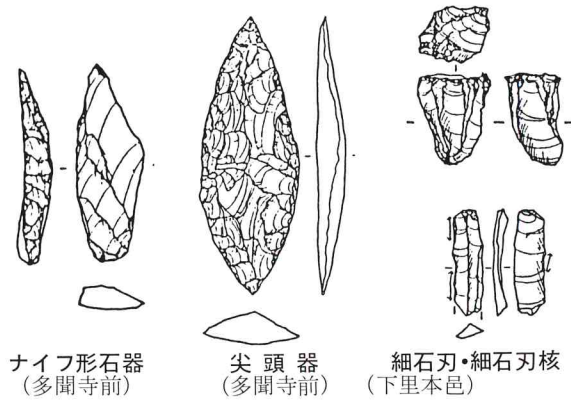
黒目川流域の遺跡分布

市内の遺跡

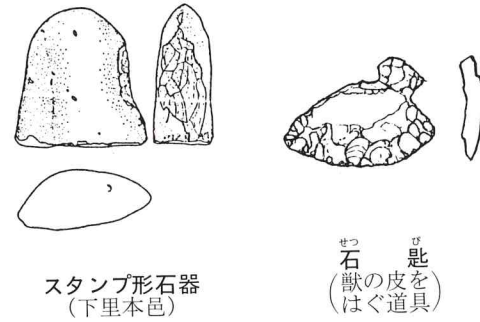
現在138ヶ所知られています。なかでも縄文時代中期が圧倒的に多く、生産形態・基盤のかわる弥生時代以降は激減します。東久留米市域の特質といえましょ



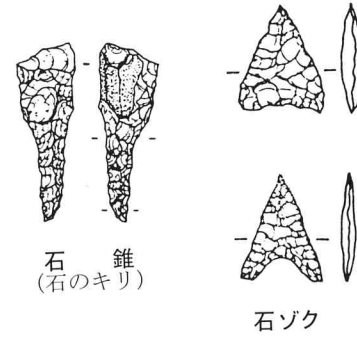
市内の時代別遺跡数



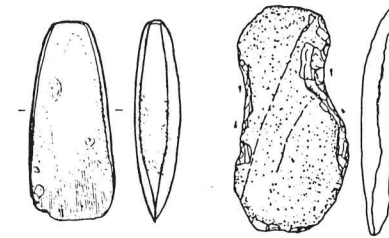
ナイフ形石器 (多聞寺前) 尖頭器 (多聞寺前) 細石刃・細石刃核 (下里本邑)



スタンプ形石器 (下里本邑) 石匙 (獣の皮をはく道具)



石錐 (石のキリ) 石ソク



磨製石斧 打製石斧 (薄くソリのあるものは土掘り具といわれる。)



台石 タタキ石 (木の実などの堅い殻をタタキ割る。)

先 土 器 時 代 10,000年前

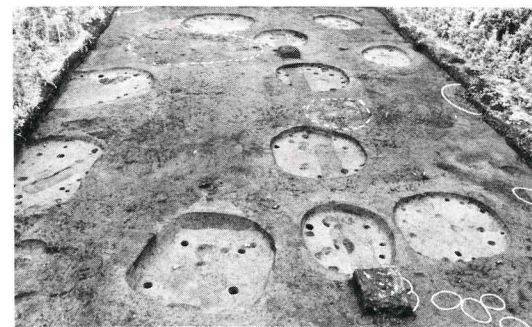
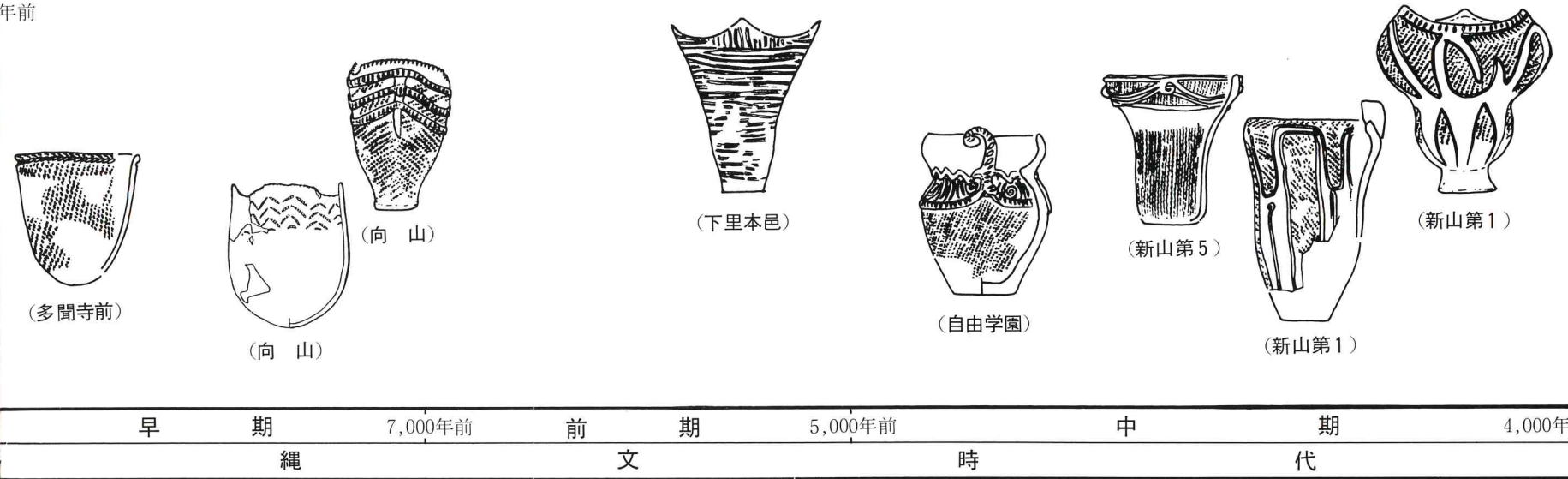
「道具」とその原形

人類は「道具」を使うばかりでなく、それをつくることで、他の動物と区別されます。

人類はその誕生(約三百万年前)以来、旧石器時代(〜一万五千年前)、中石器時代(〜一万年前)、新石器時代(一万年前=日本の縄文時代〜)と、様々の道具を数限りなく作り続けてきました。物質文明の発達した現在、道具は形を変え、用途をかえ、組み合わせられてすでに「道具」の概念ではとらえきれないものまで生み出されています。ところが、高度な道具に慣れてしまった私達は、いつのまにか最も大切にされるべき日常生活に必要な道具をつくることを忘れ、手軽に入手できる商品にそれらを求めるようになってしまいました。日常使う道具に、生活の知恵と工夫をこらして手づくりすることを知らない子どもたちが、たくさんいると聞く今日です。

ここに紹介した土器や石器は、すべて道具の原形となるもので、当時の人々の知恵と工夫がこらされています。

一点一点の道具にこめられた知恵と工夫を知ることは、私たちに何か大切なものを教えてくれるようです。



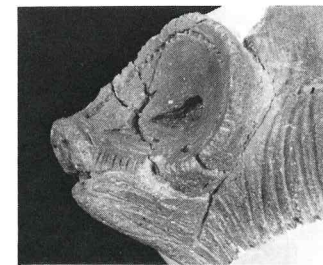
向山遺跡(南沢)の竪穴住居跡群



縄文時代の竪穴住居

縄文時代のムラの跡

私たちの祖先が、衣・食・住、生〜死までの生活に必要な施設と空間とを、一定の土地にもとめるようになったのは、縄文時代早期末〜前期だといわれています。向山遺跡からは、ちょうどその頃の縄文ムラが発見されました。



獣面付土器 (多聞寺前遺跡)

縄文時代の前期末〜中期中葉にかけて、蛇やカエルをかたどった装飾文とともに、獣面・人面などを表現した把手?が発達しました。

この獣面は、イノシシともコウモリともいわれています。



竪穴住居跡 (新山遺跡)

地面を掘りくぼめ、屋根をかけた住居の跡。炉、柱穴、貯蔵穴、カマド(古墳時代以後)などの施設をもつ。

竪穴内には、投棄・流れ込みなどによる土器・石器が多くみられます。